

南部杜氏協会から期待の新人杜氏

南部杜氏協会会員・杜氏

八重樫 次幸さん

南部杜氏協会北上支部が設立して88年。記念誌『88年史』の出版記念パーティーは先月13日、更木地区交流センターで開かれました。同支部はこれまで多くの杜氏、蔵人を輩出してきましたが、高齢化が進んでいる状況です。

そんな中、八重樫次幸さん(31歳・二子町)が、同支部からは7年ぶりとなる新杜氏に。今月末から富士正酒造(静岡県富士宮市)で酒造りに携わります。

八重樫さんは21歳のとき、南部杜氏だった父親に誘われ、蔵人として三重県へ。その後福井、埼玉、静岡と、蔵人の経験を重ねてきました。「割と小さい蔵での仕事が多かったので、ほぼすべての作業をこなしてきました。おかげで持ち場が変わってもすぐに取っ手かかれる」と心強い一言。

南部杜氏協会には、経験や試験などを点数化する独自の「南部杜氏」資格制度があり、



八重樫さんも27歳で初挑戦。不合格となったものの、落ちて良かったと振り返ります。「人の上に立つのは大変なこと。頭脳と統制力がなければ」と控えますが、蔵人である以上、良い酒を造りたいという思いは持ち続けてきました。その心意気を見込んでか、富士正酒造の社長から声がかかり、勤務3年目にして「杜氏」に。これまでは上司として見ていた職に自分になることで、気持ちの持ち方が全く

変わったと話します。「当たり前(今よりレベルを下げない)酒が造れるか不安はあります。先輩杜氏に良い手本があるので、早く追いつきたい。蔵の経営者と息を合わせることが必要なので、一緒に頑張っていい酒を造りたい」と、言葉に力強さが宿ります。

好きな飲み方は常温。友人と飲むときは何でも飲むという八重樫さん。若き新米杜氏とその酒に期待が寄せられています。



国際交流ルーム発

ハロー！ まいぶんんど ①①

ようこそ 姉妹都市・カリフォルニア州コンコード市 キャンドルライトでハッピー・アニバーサリーナイト

姉妹都市提携35周年、「Happy&Eco」をテーマにコンコード市訪問団を歓迎する「市民パーティー」は10月10日、ふるさと体験館「北上」で開かれました。

会場には2,200個ものキャンドルライトがとまりました。キャンドルホルダーは牛乳パックの再利用。市内小中学生を中心に、市民が心を込めてコンコードの人々にメッセージや絵を書きました。これに地球環境にも優しい「みつろう」と「米ぬかろう」で手作りしたエコ・キャンドルが入れられ、「Concord」「35」「北上」の文字やコンコードのシンボル「ディアブロ山」の山並みが描かれました。

次世代を担う子どもたちに、分かりやすく記憶に残る姉妹都市交流を、作業を通して伝えようと、エコ・キャンドルホルダーを自分たちの手で作ってもらいました。和賀西中、和賀西小、笠松小、いわさき小、黒沢尻北小、黒沢尻東小、黒沢尻西小の皆さんには、合計2,000個のホルダー作りにご協力いただきました。このともしびが、両市の人々の心にずっと灯っていてくれることを願っています。

エコ・キャンドルで会場に浮かび上がった「35」の文字



国際交流ルーム

電話・ファクス：63-4497
電子メール：kiah@kitakami.ne.jp
おでんせプラザぐろーぶ3階 生涯学習センター内
開館日：毎週月-土曜日 午後1時-7時
休館日：日曜・祝日、第3水曜日、年末年始

引き出しの中のラブレター	新堂 冬樹
幽霊待合室	赤川 次郎
奥州藤原氏	高橋 富雄
91歳。今日を悔いなく幸せに	吉沢 久子
仏像の見方	澤村 忠保
最近、あなた笑えてますか	樋口 強
算数病院事件	後藤 竜二
でっこりぼっこり	高島 那生
妄想銀行	星 新一
だっこのおにぎり	長野 ヒデ子

《10月の新着本から》



『人間の運命』

五木 寛之 著
東京書籍
運命とは何か。運命は変えられるのか。作家・五木寛之が到達した究極の人間論。ありのままの現実を勇気をもってはっきりと認めることの意味を親鸞の言葉を通して考える。

『星の子モーシャ』

クアトーン・カヤン 著
日本電波ニュース社 新樹社
生後7カ月で地雷を踏み、片足を失った子ゾウのモーシャは、世界で初めて、義足を付けたゾウになりました。タイの獣医が愛情たっぷり、絵心たっぷりに綴る、モーシャの成長記録。

きたかみ物産館



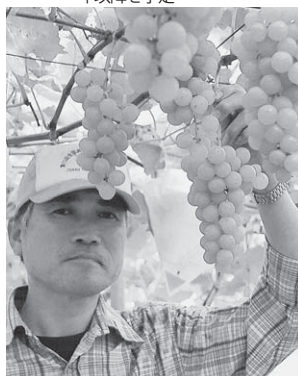
展勝の丘・風

北上産ぶどうのワイン、ジュース

「展勝の丘」(天然果汁100%ジュース1ℓ・左):1,500円
ワイン「展勝の風」(白720ml・中)、「展勝の丘」(赤、ロゼ720ml・右):会員、宿泊者のみ。一般販売は来年度以降を予定

展勝地農家民宿 三浦ぶどう園

立花12-22-1
☎ FAX 64-2409



三浦 和俊 さん

こだわりのぶどうを使用
脱サラして始めたぶどう栽培は今年で16年目。自分で自信の持てるぶどうを無農薬・低農薬栽培、販売しています。山ぶどうとの交配種ブラツクベガールを使用したジュースと赤ワイン、そしてホワイトベガールを使用した白ワインは「自分がうまいと感じたぶどうだけを使って」と三浦さんこだわりの豊かな味わいが自慢の逸品です。

※農作業やハム、ソーセージ作りなどを体験できる民宿も行っています。

散歩道

113

北上市長 伊藤 研

酒と牧水

しらたまの
歯にしみとほる
秋の夜の
酒はしづかに
飲むべかりけり

※歌碑の筆跡通り

夏の暑さが過ぎ、スキの穂が風にそよごころになると、秋の夜、若葉が恋しい季節となり、若山牧水の歌を思い出す。

先日、南部杜氏協会北上支部88年史が発刊され、日本酒の製造によって米価の調整や税金増のためなどに、若く製造が禁止されたことなど、酒に関する興味深い記事にふれて発想が巡った。

古い時代、酒造りの技術は寺の僧侶や京都の商人が有していたが、農村の閑散期を利用し酒蔵に出稼ぎした人々が、厳しい修業と経験を積んで杜氏となり受け継がれたという。岩手の

人々は特に優秀で、日本の三大杜氏の一つ「南部杜氏」の先駆者となった。

北上からも更木、二子、口内、黒岩、成田などから輩出され、全国で活躍している。更木に最初の杜氏組合ができたのは、北上の酒造りの出発点としての意気込みだったからと思われ、更木の臥牛の農業担い手センターに、牧水のこの歌の歌碑があるのは何故だろうか。旅と酒が好きだった牧水の歌碑は、全国275カ所にあるが、この歌は2カ所だけである。

牧水が立ち寄った臥牛のお宅の方が酒好きだったからなのか、更木が北上の酒の発祥の地で唯一地酒として喜久盛酒造が頑張っているからだろうか、ふと思いつく話題からの歴史の推理もまた楽しい。

鈴虫の音をバックコーラスに、うちくをかたむけつつ気分よく地酒「鬼剣舞」を飲む杯が重なったところ：「ほっほっ、いいんじやありません」…秋の夜長というのに、無粋な声が掛かった。